

京都を変えた「水」

曾部 皓大

(2018年度入学 鈴木ゼミ2期生)

京都は「千年の都」と言われるように、歴史的価値を有する建造物がたくさんある。誰もが一つは知っているのではないだろうか。では今日の京都のまちづくりの基礎となり、近代化の象徴ともいえる水路を知っているだろうか。それは琵琶湖疏水である。大津~京都間に作られた疏水で、今なお現役で活躍し、京都に水を供給し続けている。

そもそも疏水とはどういうものなのかということだが、疏水とは灌漑や舟運のために、新たに土地を切り開いて水路を設け、通水させることである。国内の疏水の総延長は約40万kmで、地球十周分に相当し農民たちが築き上げた。かつて稲作が社会の基本であった時代において、疏水は重要な役割を担っていた。だが琵琶湖疏水の建設が始まったのは、明治維新後の近代化の真ただ中であり、稲作中心の社会を作ろうとしている時ではない。ではなぜ離れた琵琶湖から水を引こうとしたのか、それは京都に活気を取り戻すためであった。京都は明治維新後、首都が東京へと移り、人口は減少し、産業は衰退していた。そのため「狐狸（こり）のすみか」と言われるほどに落ちぶれていた。このような状況の京都を、復興するために第3代京都府知事に就任した北垣国道は、琵琶湖から水を引き、その水の力で産業振興を図り、船で物資の行き来を盛んにしようと建設を計画した。

琵琶湖疏水は、大津市観音寺から京都市伏見区堀詰町までの全長約20kmの「第1疏水」、全線トンネルで第1疏水の北側を並行する全長約7.4kmの「第2疏水」、京都市左京区の蹴上付近から分岐し北白川に至る全長約3.3kmの「疏水分線」などから構成され、全長は約35kmである。疏水の建設は明治18（1885）年に始まり大学を卒業したばかりの、田邊朔郎が主任技師となった。この頃の規模の大きな土木工事は外国人技師に委ねられていたが、疏水の建設はすべてが日本人の手によって行われた、日本最初の土木事業であった。乏しい資材や、ほぼ人力による作業など、苦難も数多くあった。なかでも第1トンネル（2436m）の建設が最も難工事となり、我が国で初めて豎坑(垂直に掘りさげた坑道)を利用した工法を採用するなどの技術的な工夫を行いながら、5年後の明治23（1890）年に完成した。第1疏水の利用



法は、電気事業、運河事業、水力事業であった。電気事業においては蹴上発電所が日本で最初の事業用水力発電所として建設された。琵琶湖疏水で得られる水力を活用し明治24（1891）年5月に発電機2台で運転を開始した。

（第一トンネル）

（蹴上発電所）

電気が供給されるようになったことで新しい工場が生まれ、路面電車も走り出した。100年以上たった現在でも、発電所として電気を京都の町に送り続けています。完成当時はその電力は近接する蹴上インクラインの動力源として用いられていた。インクラインとは斜面に線路を敷き、荷物を積んだ舟をそのまま台車に乗せて運ぶというもので、原理はケーブルカーと同じである。蹴上インクラインは、南禅寺の近くにあり、全長582mの世界最長の傾斜鉄道跡で、高低差約36mの琵琶湖疏水の急斜面で、船を運航するために敷設された。大津や伏見、大阪との間で米・炭・木材・石材などが船で運搬され、観光客を乗せた遊覧船も多く行き交っていた。時代が進むにつれ船運の利用は大きく減少し昭和23（1948）年運航が休止された。現在、復元された台車などが展示されており、春は桜が美しい場所である。

明治30年代になると、第1疏水の流量では増大する電力の需要が満たせなくなり、また、地下水にたよっていた市民の飲料水が質・量ともに問題となっていた。そのため、さらなる発展のために三大事業（第2疏水事業、水道事業、市電開通及び幹線道路拡幅）が計画された。第2疏水はその事業の中核として明治41（1908）年に着工し、明治45（1912）年に完成した。第1疏水の北側にほぼ平行して建設され、水道水源として汚染を防ぐため全線トンネルである。水路延長は約7.4kmであり、蹴上で第1疏水と交差している。また、同時に第2疏水から取水する蹴上浄水場が完成し、京都市の水道事業が誕生した。第2疏水の完成により、発電量が約4倍に増加した。この電気によって新しく広げられた幹線道路に市電が走り、市内に電灯が灯され京都は更に活気を取り戻した。昭和に入ると現役施設である琵琶湖疏水の歴史的な価値についても注目されるようになってきた。そのような流れの中で、「哲学の道」をはじめとする疏水分線沿線の整備や東山緑地公園（山科区）の整備等が行われた。その後、昭和58（1983）年には水路閣及びインクラインが京都市の史跡に指定され、さらに平成8（1996）年には、これらを含む琵琶湖疏水関連施設12箇所が国の史跡に指定された。そして長らく途絶えていた船運が平成30（2018）に67年振りに復活を遂げ、明治の先人が完成させた疏水を身近に見学することが出来る。



（ 蹴 上 イ ン ク ラ イ ン ）

(琵琶湖疏水船)

今日の京都の礎は明治時代に出来上がった。これは数百年、千年以上の歴史がある寺社仏閣や「千年の都」と言われる京都からすれば最近のことかもしれない。だが今日の京都は琵琶湖疏水がなければ、活気は失われたままだったかもしれない。生活に欠かせない水、電気も琵琶湖疏水がもたらしてくれているのである。明治の先人たちが取り戻した活気を失わないために、琵琶湖疏水を守り続けていかなければならない。

参考文献

京都市上下水道局 琵琶湖疏水のご紹介

<https://www.city.kyoto.lg.jp/suido/page/0000007153.html>

琵琶湖疏水について 琵琶湖疏水記念館

<https://biwakososui-museum.city.kyoto.lg.jp/about/>

琵琶湖疏水とは びわ湖疏水船

<https://biwakososui.kyoto.travel/about/>